

自転車に乗って

六月三日（木）今にも雨が降り始めそうな曇天。

朝七時半に人民解放軍招待所をチェックアウトし、市街の方へ向かった。明日、拉薩行きの飛行機に乗るために、早朝四時半に西南航空オフィス前に行かなくてはならないので、近くのホテルに移ろうと思ったのだ。

昨日のバス停で火車站行きのバスを待っていたのだけれども、なかなかバスは来ない。同じように数人が待っていたのだけれども、いつまで待っても来ないバスをあきらめて簡易タクシーに乗って行ってしまう人もあり、残ったのは二、三人。しかしバスは来ない。たまたま通りかかったミニバスをつかまえて、一人が何事かを尋ねた。やり取りの意味はよく分からなかったけれども、ここを通る車はほとんど火車站に行くだろうと見当をつけて、あとから続いてミニバスに飛び乗った（一元）。

（路線バスとミニバスの違いについてこれまでふれることはなかったのだけれども、ここで少し説明しておきたいと思う。路線バスというのは大型バスやトロリーバスを改造した二両連結のバスで、公共バスのこと。運賃は二角から市内であればせいぜい五角ほど。ミニバスはおそらく経営主体が公共バスとは異なるのだろうけれども、小型のバスで、路線バスと並行して走っている。運賃は路線バスの数倍程度。感覚としてはタクシーと路線バスの中間のようだ。場所によっては路線バスよりも頻繁に走っているし、基本的には座れるので便利な乗り物ではある。）

火車站鉗に向かう跨線橋はあいかわらずの渋滞。

火車站のロータリーに面して郵便局があったので、覗いてみた。服務員に尋ねてみると、国際郵便も送れそうな答え。がぜん元気になって、封筒や荷造り用品を扱うカウンターの服務員に、

「コラ！ 勝手に品物に手を出すな」

とどなられながら小包用のダンボール箱を買い、あわてて小包を荷造りしたのだった。送料は二・ニキロで八〇元強。ガイドブックの情報に比較すると約二倍でちよっとショックだったけれども、荷物も整理できだし、身も心も身軽になった気分で郵便局を出たのだった。

駅前の安食堂で朝食に三鮮面と包子二個（二・一五元）。

一六路のバスで高級ホテルの錦江賓館前で下車し（その向かいが西南航空のオフィスになっている）、ガイドブックに従って錦江沿いの濱江飯店へ。フロントの事務員に尋ねてみるとツイン八八元の部屋が一番安い部屋だと言う。他にも安宿のあてはあったので、他を当ってみることにした。

錦江沿いをしばらく歩き、橋を対岸に渡ったところ、バスターミナルの近くに交通飯店というホテルがあった。ガイドブックではバックパッカーのたまり場と紹介されている。恐る恐る尋ねてみると、不安に反して簡単に二六元の三人部屋に入ることができた。四階の部屋には僕ひとりで、同室者に気を使うこともなく、ゆっくりと休憩することができた。

しばらく休憩したあと、ホテルを出た。どこかでレンタサイクルを借りて、今日は自転車に乗って成都の見所をまわろうという魂胆なのだ。

ロビーから外に出てみると、なんとつごうの良いことにホテルのレンタサイクルが目に入った。しかし担当者がいないらしくて開店休業。フロントで尋ねてみたがすぐにはらちがあきそうにもないので、あきらめて錦江沿いの小道を歩き始めた。すぐにしつこいチェンジマネーの声がかかるが、必要がなかったのでひたすら無視。

交通飯店はバックパッカーのたまり場というだけあって、付近には英語の看板やメニューを掲げた食堂が何軒か並んでいた。その隣にお菓子屋を兼ねた自転車出租（レンタサイクル）の店を発見。レンタル料は一日七元（保証金、FEC一五〇元）。自転車はこの頃の日本ではほとんど見かけることはないような実用車タイプ。中国では一般的な車種だ。

自転車に乗るのは本当に久しぶりのことだったので、しばらくはふらふらとして自分でも危うい感じだったのだけれども、すぐに昔の勘を取り戻してすいすいと走れるようになった。

錦江沿いの小道から、人民路へ。大通りでは車道を区切って自転車の道を作っているのでも走りやすい。のんびりと走っていると中国人たちの自転車は器用にすいすいと追い越していく。ゆっくりとペダルを踏みながら、僕は昔に聞いた高田渡というフォークシンガの「自転車に乗っ

て」という歌を思い出していた。

人民路の並木道を北上し、市政府を越えてさらに北上。地図を確かめながら文殊院へと通じる道に入っていく。文殊院前の小広場は自転車置場になっていて、預かり料は二角。

文殊院は一八〇〇年にも及ぶという四川省における仏教の歴史を経て成都市内に現存する唯一の仏教寺院だ。多くは文化大革命の時に徹底的に破壊されてしまったのだという。観光客やお参りの人々にまじって、天王殿、三大士殿、大雄宝殿、藏経楼とまわっていった。山門の脇には『般若波羅密多心経』の石碑が建てられてあり、僕はふと足を止める。すでに奥の院に行ってしまった親父の仏壇に向かって般若心経を唱えるお袋の姿がふと心を過ぎった。

文殊院を出てからしばらく道に迷い、成都市の北西にある王建墓へと向かった。王建は五代十国といわれる唐朝崩壊後の群雄割拠の時代に成都を都とする前蜀をうちたてた人物で、四川に逃げ込んだ唐朝貴族を手厚く迎え、また民衆からの信頼も厚かったといわれている。

門を入れてすぐに王建らしき人物の、高さ三メートルほどの石像がそびえていて目を引きつける。しばらく歩いて服務員から墓室参観券を買い、王建の墓へ。墓はちよつとした丘のようで、直径は八〇メートル、高さ一五メートルといわれるが、その全貌は分からない。ひんやりとした墓室内部に入っていくと、全長二三・四メートルの墓室中央には棺を置いた石壇がどっしりと据えられている。その側面には華やかな彫刻がほどこされている。はっきりとは分からないが、二四人の奏者からなる宮廷楽隊と二人の力士の像だということだ。

自転車に乗って、さらに西郊外にある杜甫草堂へと向かう。つもりが道を間違えて、ひとつ北を西方に伸びる十二橋路という道を走っていったらしい。なにかがらんとした印象のする道の両脇にはときおり桃や柑橘類の果物をカゴに入れて売る人たちがいたが、どこまで行っても杜甫草堂らしきものは現われない。舗装道にもかかわらず、車が通り抜けるたびに埃や砂塵が舞い上がり、息もしづらいようなのだ。

いくども地図と地理とを見比べて、ようやく道を間違えたのだと納得し

た。自転車に乗り続けるのも疲れたし腹も減ってきたので、たまたま目についた食堂で排骨面三斤（大盛り）を食べた。

目前の道路には舞い落ちる間もないままに埃が立ちこめていて、それを眺めながら昨日の新都への道のことも思い出して、僕は中国人たちがやたらと痰を吐くことを納得していた。そういえば僕自身鼻の調子が良くないのだ。いつも何かつまったような感じで、何度も鼻をかんでいると紙に血がつけていたりする。たぶん空気が良くないのだろう。

見上げるとあいかわらずの曇天。わずか二日間の滞在だけでも、「蜀犬は陽に吠く」というほど晴天の日が少ないこの地方の気候を納得する。

腹ごしらえもすませて、気を取りなおして十二橋路を逆戻り。かつての道教寺院青羊宮の独特の外観を横目にして、杜甫草堂のある成温公路を走っていく。やがて杜甫草堂着。入口前に自転車を預けて、入場門を入っていく。

詩聖といわれる唐代の詩人、杜甫（七一―七七〇年）が安史の乱を逃れて七六〇年から約四年間ここに滞在し、その間約二四〇首の詩をつくった。

草堂内部の小道をたどり、木立や竹林の所々に建てられた堂で休憩した。人影はあまり多くはなくて、静かだった。ずいぶん長い道程を自転車であつたので少し疲れていた。堂内には詩集や資料の陳列室があるはずだったが、けれども、休憩しながら静かな堂内をひとまわりして杜甫草堂をあとにすることにした。

自転車で乗って、杜甫草堂から武侯祠へ。成都西郊外から成温公路を一環路まで戻り、ひたすら南下。武侯祠大街という大通りを東に向かって進む。武侯祠周辺にはその歴史を意識したかのようなたたずまいの建物が並んで、いかにも観光地という印象だった。門前の歩道には『武侯祠』と記された大きな碑も建てられていてすぐにそれと分かる。

武侯祠というのは、三国時代、蜀王・劉備の武将だった諸葛亮（字名は孔明一八一―二三四年）を祀ったところで、もともとは劉備を祀った「照烈廟」と並んで建っていた。その後一四世紀になって武侯祠は照烈廟に併合された。しかしながら人々は主君劉備以上に諸葛亮を偲び、現在に至る

までここを武侯祠と呼んでいる。

正門を入場して石畳の道をしばらく行くと劉備殿、さらに奥へと進んでいくと諸葛亮殿がそびえている。殿の内部には劉備、諸葛亮をはじめとして蜀漢時代に劉備に仕えた武官、文人の塑像が据えられている。また様々な有名な書や碑などが展示されている。

書や碑の方はともかくとして、三国史にもなじみの少ない僕としては、いかにも福々しい外観の、おまけに金色の劉備や諸葛亮像にはちよつとついていけないという気がした。

武侯祠の内部には劉備の墓「惠陵」もあり、そちらの方もぐるっとまわってひと休み。三国史や中国の歴史に詳しくればもう少しは楽しめたかもしれないなと思いつつ、煙草を一服した。

武侯祠を出てから、すぐに自転車で出発するというのはしんどいという気がしたので、入場門脇に店を出していた露店でココナツの缶ジュースを飲みながら、もう少し休憩。歩道に座り込んでジュースを飲んでいる僕の目の前を、女子高生らしき女の子たちが自転車で通り過ぎていった。

武侯祠からはそのまま東に向かって行けばホテルに戻ることができるのだけれども、途中で露店の立ち並ぶ自由市場があったので、自転車を押しながら人々で混雑する通りに入ってしまった。果物（柑橘類、桃、すいか、バナナ、りんご、梨など）や豚肉、鶏、牛肉、卵、それから香辛料の類、饅頭の粉、乾メンなど、ありとあらゆる食べ物の並んだ市場を行き交う人々、飛び交う中国語、そして無数の食べ物匂いがこんぜんと一体になってあたりには漂っていた。

降りはじめた雨に濡れながら、錦江沿いの道を走る。半日間のサイクリングにいささか疲れて、ようやく交通飯店着。自転車出租の店に自転車を返して、ついでにチョコレートを買った。久しぶりのチョコレートだ。

ホテルに戻る前に夕食をすませてしまおうと思って、汽車站の方へ歩いていった。汽車站の脇は新南路という通りで、汽車站が近いということもあって賑やかだ。歩いていると食堂や旅館の呼び込みをしている人たちが声をかけてくる。

雨が降っていた。しだいに強くなってくる雨に、人々は雑貨屋の軒やら屋台のパラソルの下、あるいは街路樹の陰などで雨宿りをしていた。

商店の軒から軒へと、僕は雨を避けながら歩いていった。適当な食堂を捜していたのだけれども、実は昼過ぎに十二橋路で食べた排骨の大盛りがまだ腹に残っていて、あまり腹は減っていないのだ。中途半端な腹具合で、それでも晩飯は食べておかないと、という気持ちで歩いていると、ふと食堂が目についた。何を食べたい、という気持ちも固まらないまま、ふらふらと食堂に入っていくと、食堂の男は、

「一元の面はどうだ！ 一元！ 一元！」

とまくし立てる。どうやら本日のお勧め品らしいのだけれども、もう面は腹には入らない、と頭のどこかでは考えながらも、男のお勧めの勢いに流されて、

「はい、お願いします」

と答えてしまった。

お勧め品の面は確かに大盛りで一元では安いと思われたけれども、朝も面、昼も大盛りの面、晩も大盛りの面で、面の匂いが鼻について食は進まない。食欲増進のために隣の男が食べていた料理（ニラと肉の炒めもの）を追加注文し、ようやくの思いで食べたのだった。

食堂を出たときにも、雨は降り続いていた。夕暮れの街を街路樹の陰や軒を渡るようにして交通飯店へと戻った。帰りに汽車站前の売店で缶ビール（あいにくビンビールは見当らなかった）を仕入れたことは言うまでもない。

交通飯店の部屋に戻ると、三つあったベッドはふさがっていた。他の二人はフランス人のカップル。ガイドブックのチベットに関する情報を仕入れつつ（それはあまり役には立ちそうにないほどのものだったけれども）缶ビールを飲み、明日の朝は早いので早々に寝た。

※

六月四日（金）午前四時前、まだ寝静まった交通飯店の階段を下りてい

く。フロントを渡り、裏口からホテルを出た。夜明け前の暗い静けさの中を、錦江南側の小道をたどっていく。

ずしりと重たい旅の荷物を肩にして暗い小道をうつむきがちに歩いていく、ズック靴の一步一步が、ひとりだということを呟いているようだった。しかし孤独とか寂しいということとは違う。いざ語ろうとすると言葉はこぼれ落ちてしまう、いわば中身のないしかし痛切な感覚が、夜明け前の小道をたどる僕のどこかにうずいていた。

大通り（人民南路）では静まりかえった歩道で女の人がひとり、大きな竹箒で道路の掃除をしていた。交差点のところはひとつ、西南航空オフィスの前にひとつ屋台が出ていて、裸電球の小さな明かりを暗い歩道に投げかけていた。

空港バスはまだ来ていなくて、十数人くらいの方がオフィスビルの階段や付近の歩道に集まっていた。しばらく待っている間に、三々五々旅行者は集まってきて、数十人。ほとんどは中国人で、中に二組ほど西洋人のバックパッカーのグループ。

やがて空港バスが到着。普通のバスとミニバスとの中間くらいの大きさのバスで、案の定乗車口が開かれるやいなや押し合いへし合いの乗り込み合戦になった。当然のように僕もまた合戦に突入したのは言うまでもない。ふと振り返ると、合戦を離れて西洋人の女性が肩をそびやかしてうんざりした顔をしていた。

満員で乗れなかった数人を残して、ぎゅうぎゅう詰め空港バスは夜明け前の暗い成都の道を走る。空港までは三〇分ほど。

搭乗手続きをすませて、空港使用料四八元（FEC）を支払い、待合室へ。通路にコーヒースタンドの売店が出ていたので、朝食にケーキパンとコーヒースタンドを買った。

待合室の座席に腰を下ろして出発を待っていると、何かの売り子が行ったり来たりするのが目についた。別になにも欲しいものはなかったのだからとはなしに見ていると、なんとそれは簡易型の酸素補給器なのだった。旅客たちの何人かは購入していたが、それを見て僕は自分の無防備さになら

と思ひ当たる。中国の街から街へ移動するように何の準備もしないままチベットまで足を伸ばすことになったのだけれども、ちよつと甘いというか無謀なことをしているのではないかと。

ふと日本語が耳に飛び込んできてそちらの方に注意を向けると、どうやらテレビの撮影隊のようだった。彼らのひとりが酸素補給器を購入し、高山病のことについて何やら講釈している。撮影隊のクルーたちは少し緊張しながら彼の講釈に耳を傾けていた。僕も少し緊張し、もしものために酸素補給器を買おうかと思つただけけれど、それを買っている旅客は少なかつたし、まあなるようになるだろうとタカをくくって、結局は買わなかつた。

ラサ行きの飛行機はほぼ定刻に離陸した。

飛行機のシートに腰を下ろして離陸を待っているとき、ふとある感覚がある痛切な感覚が僕を過ぎつた。それは鈍痛のような微かなうずきを残して、僕という平面を吹き抜けていった。それをどのように名付けたらいいのだろう。僕の言葉がつねに、すでに、こてんぱんにそれによつて取り残され、微かな悔いに似た感情を僕に落すもの。言葉も感情もついに事後的な模倣にすぎないということ、ある種の断念とともに思い知らせるもの。だが機体の上昇とともに新しい旅への漠然とした期待がすぐに僕の意識を占領し、それを捉える間もないままにその感覚は通り過ぎてしまったのだった。

成都から拉薩への約二時間の飛行のあいだ、地に足のつかない不安な浮遊感に包まれながら、しかし僕は微かな気がかりを抱いていた。それは自らの中国旅行を散歩と名付け、そのような構えで旅をするということに関する気がかりだった。それは僕自身の現実に即したものだし、中国といえば歴史、漢詩、あるいは侵略、あるいは革命、あるいは開放経済という先入観に対しては、ある種の有効性をも持っているものだろう。しかしこの同じ構えをもって、チベットに足を踏み入れてもいいものかどうか。もちろんいいも悪いもないのだけれども、そのことによつて何か大切なものがこぼれ落ちてしまうのではないか、という気がかりだ。

もちろん僕はチベットに入境するためにはもつと準備をするべきだとか、もつと困難を味わうべきだとか言っているわけではない。散歩は聖的なものをかき消してしまう。聖を無効にし、すべてを散歩の平面に解消し、平坦化してしまう。散歩はいともお気軽に聖をまたいでしまうのだ。そしてチベットというのはある種の聖だ。そこに暮らす人々にとつても、また違う次元で僕自身にとつても。もしもお気軽に聖をまたいでしまうという傲慢を避けようとするのならば、そこで散歩は散歩であることをやめなければならぬ。僕はどのようなスタンスでチベットを歩けばいいのだろう。

一方ではチベットというのは、あるいは魅力的なしかも手垢にまみれたイメージの宝庫なのだ。旅人は困難の末に、あるいはいとも簡単にチベットに入境し、チベットというイメージ、そこに今自分がいるというイメージを思い存分呼吸する。いわば神秘的で、粗野な観光地、としてのチベット。それは中国四〇〇〇年の歴史と同等の平面における価値であり、それ自体としては僕の旅の目的にはなりえない。

チベットは中国であり、中国ではない。それは中国の異郷なのだ。僕はこのフライトで確実にある種の境界をまたぐのだと思う。そしてその瞬間、散歩は断絶し、おそらくはもうひとつの散歩が始まる。何故なら散歩というのは僕自身のそうであるしかない現実なのだからだ。僕に残された課題は、つねに行くこと、いわば切実に散歩することだ。

僕たちはその瞬間をめざす。いわば散歩が一瞬絶句するその瞬間を。そしてたどり着いたと思ったときには、瞬間をまたいでしまうのだ。僕たちは決して瞬間に立ち止まることはできない。たとえ振り返っても、僕たちが目撃するのは瞬間のぬけがら、瞬間の模倣なのだ。

僕は自らに言う、

「行くこと。ただ行くこと。ひたすら行くこと。できうる限り、つねに行くこと」

僕は微かな気がかりを抱きながら、すでに眠る態勢に入っていた。あまりに朝が早くて眠たかったし、運悪く座席は窓から離れていて、外を眺めるといふこともできなかったからだ。

少し眠って目覚めるときには、僕はすでに何かを、どうしようもなく、

まだいでしまっているはず…。